診療室

鍼灸治療と私 ―ブラジルからの研修生を迎えて―

種村高一[†]（種村獣医科医院院長・茨城県獣医師会）

家畜への鍼治療を手がけて37年になる．祖母が盲学校に勤務していたこともあり，幼いころから生徒さん達が鍼灸治療の勉強をする姿を目の当たりにしてきた．その影響が多分にあってのことか，動物への鍼灸治療に興味を抱いていた．

獣医師2年目の昭和52年秋，福島県矢吹の酪農講習所だったと記憶するが，中国から講師を招いて開催された，「牛の鍼灸治療」の講習会に参加したのが，小生の鍼灸治療の発端となっている．その後，日本大学の臨床繁殖学研究室に所属し，中国の北京農業大学や蘭州の中獣医研究所などに出向き，牛の繁殖障害に対する鍼灸やレーザー療法の共同研究をしていたが，天安門事件以来行き来が途絶えてしまった．

時は流れ，平成9年春，かつての北京農業大学で王教授の助手であった謝先生がフロリダ大学の助教授となって移籍したのを機会に，日本大学の学生達とフロリダ大学で，陰陽学とツボ・経絡に関するセミナーを受講することができた．難しい内容であったが，理論を踏まえた応用法を学ぶことができたセミナーであったと記憶している．

日頃の臨床では，主に乳牛の運動器疾患や消化器疾患に応用し，先輩に習いながらの鍼麻酔による第四胃変位整復手術や，倒牛による乳頭手術，断蹄術も経験した．小動物では犬の椎間板ヘルニアへの応用が最も多く，跛行や麻痺などの神経障害にも応用している．

昨年9月，ブラジル連邦共和国から要請を受けた茨城県の依頼により，動物の鍼灸療法・リハビリテーションを学びたいという研修生を受け入れることになり，本年2月末日までの6カ月間，互いに楽しく学ぶことができた．研修生は父方の祖父が茨城県出身，祖母が沖縄県出身の日系三世で，サンパウロ州在住の女性獣医師（28歳）．大学を卒業し獣医師免許を取得後，大学院課程で，動物鍼灸師，中国漢方医の資格を取得し，3年間の勤務獣医師を経て，鍼灸とリハビリテーションを専門とした訪問獣医師として開業している．彼女のブラジルでの日常は往診のみで，1日に5～10件を対象に訪問診療しているが，サンパウロは交通渋滞のため，往診に時間がかかるし，治安が悪いので夜間は気を付ける必要があることを話してくれた．診療施設は一切なく，往診車が1台だけで「私の病院は狭いです．机と私のベッドだけ！」とすべて自室で賄っていることを誇らしげに，笑いながら語っていた．

来日当初は語学研修のための日本語学校への通学と病院での診療研修との両立で，かなりハードな毎日であったことを思い出す．言葉のハンディキャップと，習慣を異にする日本での生活に不安や不自由はないだろうかと心配をしていたが，本人は好感をもって新たな生活に溶け込んでくれた．日を追うごとに身構えていた緊張も和らぎ，日本語も上達し，笑顔で出勤してくる姿に病院のスタッフ一同が安堵し，いつしか言葉以上に心が通い合うようになった．我が家の家族ばかりではなく，スタッフや飼い主とも会話が弾むようになり，診療研修をしながら，飼い主と国際交流を深める場面も日常のこととなった．来日の目的である鍼灸術についても良く勉強し，積極的で理解度も高く，お互いが単刀直入な言葉のやり取りで研修を進める中，日常の内科診療や外科診療の他，ウサギや外来種のトカゲ，モモンガ，カメ，ハムスター，フェレット，チンチラなどのエキゾチックアニマルにも，写真を撮りながら興味をもって臨んでいた．ヤギ，牛などの草食動物の診療や往診の折には，往診先の酪農家の方々とブラジルの生活や様子などの話題に花を咲かせ，親交を深めることもできた．また，日本大学生

種村高一

―略　歴―

1975年　日本大学農獣医学部獣医学科卒業
同　年　茨城県北酪農業協同組合入組
1987年　同退職
同　年　種村獣医科医院　開業
1995年　㈲アニテック　種村獣医科医院　設立
2008年　㈲アニテック　種村鍼灸接骨院　併設
2013年　㈲アニテック　種村薬品　併設
2014年　現在に至る

† 連絡責任者：種村高一（種村獣医科医院）
〒310-0903　水戸市堀町2295-6　☎029-252-9351　FAX 029-254-6751　E-mail : tanekou@forest.ocn.ne.jp

物資源科学部を訪問しキャンパスと動物病院を見学させていただいたが，二次診療施設としての設備や規模に驚きと関心を示していた．

このように，研修生にとって，朝から夜までの研修日程はハードな毎日であったが，牛の往診をしながら，観光や歴史スポットにも立ち寄り，茨城の文化にも触れ，休日を利用して北海道の雪まつりも観光した．

帰国を間近に控えた2月20日には，茨城県庁で研修生の研修報告会が開かれ，その中で牛，ヤギ，犬，猫，小鳥のほか数種類の動物をスライドで紹介し多くの動物の診療に関われたことや，目的の鍼灸治療で308件の症例について研修ができたことに喜びを示してくれた．その喜びは私自身のものでもあったし，今なお，母国ブラジルで研修が役立っているならば，この上ない喜びであり，鍼灸が取り持ってくれた国際交流に感謝している．

彼女の両親の職業や家庭の様子から，裕福な恵まれた環境にあることが伺われたが，彼女の生活の姿勢やマナーに，遥か地球の裏側でかつての日本文化が息づいていることを教えられ感動を覚えた．

帰国後の更なる研鑽と活躍を祈りつつ「遠く，ブラジルに咲く清楚な日本なでしこであれ」と，お土産のひな人形に書き添え，研修の記念としたのだった．